卒業論文

ラオスの教員養成校における健康・環境教育の質的向上のための予備的研究
～ラオス都市部の大学生における健康・環境認識の解明～

鳥澤一馬

キーワード：環境、健康、認識、概念化、教育

Ⅰ.はじめに

近年、発展途上国の教育において、健康、環境教育の導入が進められているが、学校現場で教育を実践する教員の学習の機会が限られていることが指摘されている。ラオスにおいても、健康、環境教育が導入されているが、質の高い教育を提供するためには、教員養成校で提供される健康、環境教育の質的向上が課題とされている。これまでの研究では、学習者の学習対象への興味、関心は学習に対する内発的な動機づけとなり、学習者の学習意欲を持続・向上させることを可能にすることが報告されている。また、学習意欲の向上は、学習内容の理解度を高めることが報告されている。それ故に、学習テーマを学習者の認識・興味・関心をもとに設定することは学習内容の理解を高めるために重要である。しかしながら、教育の質的改善を目指すラオスの教員養成校において、学習である学生が健康、環境に対してどのような認識をもっているかを明らかにする研究は行なわれていない。

Ⅱ.研究の目的

本研究では、ラオスの教員養成校の学生の身近な地域・生活環境に対する認識、環境・健康についての認識・興味・関心を明らかにすること、また、得られた調査結果から、ラオスの教員養成校の学生の認識、興味、関心にそった健康、環境教育の学習内容を検討することを目的とした。

Ⅲ.研究の方法

①地域環境や健康、環境問題についての認識

2012 年にラオスの教員養成校の学生 50 名を対象に、自記式の質問紙を用いた質的調査を実施した。質問紙は、先行研究を参考にして、ラオス人研究者の協力を得て、開発した。自由記述で、現在、住んでいる周囲の地域の環境について、1) 危険・怖い、2) 不快・不便・不衛生、3) 快適・良い・安全、4) 自慢できると感じていることについて回答を得た。また、「現在および 5 年後に深刻になると思われる健康・環境問題」、「興味のある、学びたい健康・環境問題」について回答を得た。データは、KJ 法を用いてカテゴリーに分け、概念化を行った。

Ⅳ.結果と考察

1.身近な地域・生活環境についての認識

1-1.危険・怖い、不快・不便・不衛生と感じていること

環境問題、環境汚染、自然災害、災害等の「自然環境」に関すること、移動手段・交通網の不整備・悪路・交通事故、感電、不安定な電力供給、室内外の照明の不十分さなどの「生活インフラ」に関すること、犯罪の発生、人間関係の悪さ、人ごみなどの「社会環境」に関すること、不衛生、感染症など、「衛生環境と疾病」に関することが挙げられた。

1-2.快適・良い・安全、自慢できると感じていること

1-1 で挙がった内容と対極の内容が挙がった。新たに「信頼のおける政治・政策」が挙げられた。

2.健康・環境問題についての認識、興味、関心

現在の健康問題としては、感染症（インフルエンザ、マラリア、下痢）や肝吸虫が多く挙がり、5 年後に深刻になる健康問題としては、生活習慣病（胆肝系、循環器系、呼吸器系の疾患）や、HIV/AIDS が多く挙がった。現在の環境問題については、環境汚染（森林、大気、河川の汚染）や、洪水が多く挙がり、5 年後に深刻になると思われる環境問題としては、干ばつや、雨季のズレが多く挙がった。興味のある、学びたい健康問題としては、生活習慣病、感染症、精神疾患が多く挙げられ、環境問題としては、洪水、気候変動が挙げられた。

上記の結果から、学生は、感染症だけでなく、生活習慣病に対しても関心を持っていることが明らかとなった。これは、生活の近代化が生む疾病構造の変化が、学生にも認識されていることによるものだと考えられた。また、肝吸虫が挙げられた理由としては、ラオスの風土病であるため身近に感染者が多いことが考えられた。環境問題として、森林破壊や、洪水などが挙げられた理由としては、ラオスが、森林と水資源に恵まれた国であり、国を挙げた保護政策が進められているため、その保護や脅威に対する関心が高かったためであると考えられた。

Ⅴ.結論と課題

ラオスの教員養成校の学生の身近な地域・生活環境についての認識と、健康、環境問題を検討した結果、ラオスの教員養成校での教育が推奨される教育テーマとしては、「洪水」、「気候変動」、「森林や河川の汚染と保護」、「感染症」、「生活習慣病」、「肝吸虫」、「メンタルヘルス」、「怪我、交通事故」、「日常生活における防犯の仕方や薬物依存の回避」などを盛り込むことが効果的であると考えられた。また、今後は、現行の教育で扱われている内容と今回の結果を比較し、具体的な教材内容の考案と提言が本研究の課題となった。